

P-105

臨地実習指導者の統合演習参加における効果

石巻赤十字看護専門学校 看護科

○鈴木美也子、森岡 薫、阿部 公子、佐々木浩子

【はじめに】2009年のカリキュラム改正に伴い統合分野が設置された。その背景として卒業直後の看護師の能力と臨床で求められる看護師の能力の乖離が指摘されている。そのため、統合演習もより臨床に近い形で実施が効果的と考えられる。今回、当校は3年次11月に行った統合演習で、実際の患者をよく知る臨地実習指導者に患者役で参加してもらった。その効果を学生へのアンケートから明らかにしたので報告する。

【目的】臨地実習指導者が患者役を務めた効果を明らかにする。

【方法】3年生39名に質問紙を配布(回収率94.9%)。調査項目ごとに集計し百分率を算出し、その理由を自由記載とした。

【結果および考察】「指導者が患者モデルで参加したことは良かったか」に89.2%が良かったと答えている。理由として「指導者がモデルで、より臨床に近い形ででき勉強になった」「学生間で実施するよりも緊張感があって良かった」から、これまでの演習は看護師役・患者役を学生が行っていたためお互いに合わせた動きをしていたが、今回、指導者は実際の患者に近い反応を返すことになったため、より臨床に近い演習となった。・「指導者がモデルで緊張しましたか」に94.5%がはいと答えている。「指導者が患者役で良い緊張感で臨めたと思う」から、多くの学生が緊張感を前向きにとらえ、援助を実施できた。しかし「モデルが指導者なので、とても緊張してしっかり対応することができなかった」から、学生によっては指導者が患者役であることに負担を感じていた。・「指導者の講評は参考になりましたか」に91.9%がはいと答えている。理由としては「指導者がモデルになったことで適度な緊張感があり、適切なアドバイスがもらえた」から、より現実の患者に則した具体的な評価が得られたためと考える。

P-107

インターンシップにおける教育的関わり 一 毎日の記録とコメント記載から一

長野赤十字病院 看護部

○坂口 直子、宮澤美津子

【はじめに】インターンシップは、学生が病院の特徴や職場環境を知る機会となる。A病院では3～5日で、毎日終了時に体験内容や感想を自由記載し、看護部長・副部長がコメントを記している。今回、記録を介した教育的関わりを検討する。

【方法】2010年8月から2012年3月までの看護大学生の10回分の記録とコメントから、教育的関わりを検討する。

【結果・考察】1. 一年次には「驚き」「感動」「看護技術の未熟さ」「手洗い」「大切な補助者の存在」などが記されていた。コメントでは「対象の反応に注目」「確かな看護技術」「スタンダード・プリコーション」「チーム医療」などが記され、対象理解や概念化への橋渡しがされていた。2. 二年次には「まだ未熟な看護技術」「各病棟の看護方式」「訪問看護での感動」などが記されていた。コメントでは「ポイントを押さえた技術の訓練」「看護方式の違いはなぜか」「在宅ケアの大切さと課題」などが記され、より深い学習やエビデンス追究への動機づけがされていた。3. 三年次には「ICU看護師が、大学で習った通りの見事な声掛け」「移植患者への看護師のケアの大変さと大切さ」「パウチ装着場面の患者のひと言一そのときの私」などが記されていた。コメントでは「看護体験の積み重ねの大切さ」「眠っている機能を呼びおこす看護の力」「黙って見守る」ことが必要なきもと」と記され、看護の可能性の追究、看護の困難さ・奥深さに言及している。

【おわりに】インターンシップは、臨床における「看護の質」に触れる機会であり、実習ではできない体験の機会ともなる。日々の記録とコメントを介し、既習の知識との統合や次年次への学習課題の明確化に生かされると考える。

P-106

急性期病院における「在宅看護論」臨地実習の受け入れ

松山赤十字病院 看護部¹⁾、愛媛県立医療技術大学²⁾、松山赤十字看護専門学校³⁾

○友澤 永子¹⁾、土谷 仁美¹⁾、岡本かおり¹⁾、窪田 静²⁾、渡邊八重子³⁾

看護を取り巻く環境は、少子高齢化の進展、疾病構造の変化、医療の高度化・専門化、国民のニーズの多様化、さらに、保健医療福祉制度の変革など大きく変化してきた。

当院も「医療を通じた地域への貢献」を理念に、地域医療支援病院として急性期医療を担当し、地域の医療・福祉機関との連携、さらに地域包括型医療福祉体制の構築を目標に活動を推進してきた。この活動の一つとして平成19年に「療養支援」を開始した。これは、「専門領域のエキスパートナースを、専門領域(現場)に所属したまま療養支援活動に特化させる」というものである。活動開始から5年が経過し、在宅看護との連携についての成果が確認された。

この成果を受けて、近隣の医療系大学の看護学部における「在宅看護論」臨地実習受け入れという機会を得た。

「在宅看護論」の実習目的は、継続した看護に焦点を当てた病院における療養支援(5日間)と、生活の場での療養に看護を提供する訪問看護(5日間)の体験を通して、疾患や障害を持った人が、その人らしく生き生きと生きていくために、生命を守り、生活を支え、人生を導く在宅看護を学び、看護師に求められる課題を理解することであり、その中の療養支援を担当した。

看護実践者は、「何を想い、どう実践しているのか」いつものケアを行い見せ、自分の想いや考えを語ることを基本姿勢とした。実習プログラムは、(1)療養支援の実際を見る (2)事例報告から実際を知り感じ考えたことを他者と意見交換 (3)学内シェアリング (4)作業ワークなどを取り入れた。56名の学生が臨地実習をした。

今回、初めての試みであった急性期病院における「在宅看護論」の臨地実習を受け入れることの意義、受け入れ経過と評価を報告する。

P-108

初回臨地実習で感じる看護学生として必要な基本姿勢と態度に関する意識の変化

岡山赤十字看護専門学校

○大場 広美、田岡 昭見、村上 礼子、守安 恵子、氏平美智子

【目的】初めて実習に臨む看護学生の臨地実習前後の「必要な基本姿勢と態度」に関する意識の変化を明らかにする。

【方法】平成23年7月、A看護専門学校1年生56名を対象として基礎看護学実習Iの実習前後に、独自に作成した無記名自記式質問紙調査を行った。実習前オリエンテーションで身だしなみや態度など説明後に実習前の質問紙を配布し、実習中は初日から最終日までアピアランスチェック表を用いて自分の身だしなみと態度面について同級生と担当教師の両方から他者評価での確認を毎日実施した。実習全体反省会を終えた後で実習後の質問紙を配布した。1.健康状態について、2.身だしなみについて、3.態度面についての3項目で構成し、大変思う～全く思わないの5段階で記入したものを単純集計した。倫理的配慮として、質問紙は無記名で自由参加とし、文章と口頭で説明し、同意を得た上で回収箱にて回収した。

【結果】回収数は、実習前56名(100%)、実習後53名(94.6%)であった。そのうち6名は就業経験があった。実習前後の変化として、1.健康状態についての項目では平均点が低下したものはなかった。2.身だしなみについての項目では、髪の色・つけまつ毛・アイラインなど化粧に関することやユニフォームのしわなど服装に関することの平均点が低下した。3.態度面についての項目では、挨拶をすることのみ平均点が低下し、丁寧な言葉遣い・個人情報保護などについては全員必要性を感じていた。

【考察】自己の健康状態や態度面については、実習後には実習前よりも必要性を感じていた。一方、毎日アピアランスチェックをしているにもかかわらず身だしなみについては平均点が低下している項目もあった。今後学生の意識の変化に影響した要因を分析する必要がある。